雪

一

弘(ひろし)が、朝、学校へ出がけにげんかんでくつをかた方はきかけたとき、足下(あしもと)に写真入りの活動(かつどう)のビラの落ちているのに気がつきました。拾い上げてしばらく見ていましたが、つまらなさそうにそれを丸めてすてると、くつのひもを結びながら、

「お母さん、お天気はだいじょうぶ？」とおくへ向かってどなりました。

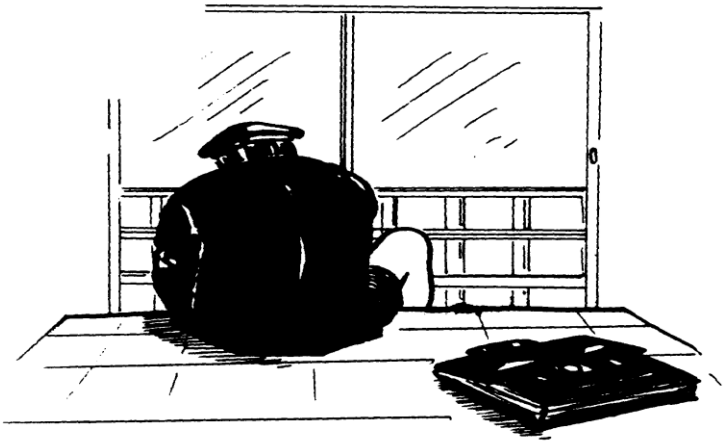
「あら、まだ出かけないでいたの。もう、とっくに行ってしまったのかと思ったら。」

と言い言い、お母さんが出てきました。

「いやな人ね、九時までに四十分しかないなんて、さんざお母さんをせかせておいて。

かつどう…映画

だいじょうぶよ、こんないいお天気じゃないの。」
「だって新聞に、小雨もようってあったよ。かさを持ってった方がいいかしら。」
「そうだった？　このごろの天気予報（てんきよほう）はあてにならないけど、でも心配だったら持ってらっしゃい。」
「何だい、今、母さんだいじょうぶって言ったくせに。」
「ほら、またそういう分からないことを言うわ。」
「だってお母さんが―」
「また始めた。何年になったの、弘。お母さんは頭がいたいんだから、そういちいち世話をやかせないでちょうだい。」
お母さんは、キンキンひびく声でおこりました。



「ちょっ。」と、弘は心の中で言いながら、
「いって来まぁす。」と、どなるように言うなり、ガラッ、ピシンと格子戸をしめて、かさを持たずに出ていきました。
からりとした冬晴れのいいお天気です。道の片側の葉を落としつくしたポプラの木が、青い深い空にそびえ立っていました。
弘は、お母さんにしかられたので、むしゃくしゃしてたまりませんでした。
「何だ、お母さんのばか。お母さんのばか。」
と心の中で言いながら、足早にさっさと歩きました。
弘は、今年六年生で、郊外から省線で市内の小学校へ通っているのです。
去年まで、弘の家は市内にあったのですがお役所へつとめていたお父さんがなくなってから、こちらへ引っこしてきたのです。しかし、お母さんは、弘をなれない学校へ入れるのがかわいそうなので、今までの学校へ通わせているのでした。

省線…もと、国の鉄道省、運輸省の管理した鉄道

弘が駅へ来て大時計を見上げると、もう九時二十五分前になっていました。急いでパスを見せて改札口を出ると、向こうから上りの電車が来るところでした。弘は、あわてブリッジをかけ上がりました。

二

お昼に、弘（ひろし）はおべんとうの包を開けてみてはっとしました。はしが入っていません。

「ばか、ばか、お母さんのばか。」と弘は心でどなりました。

いつか弘たちの組の信（のぶ）ちゃんという子が、はしをわすれてきて、えんぴつで食べたことがあります。でも弘は、とてもえんぴつでは食べる気がしません。

「あっ、お初（はつ）。」

ふいに、弘のとなりにすわっている明（あきら）ちゃんが、こう言って弘の背中をトンとたたきました。

「あいた。何だい、いたいじゃないか。」

弘は、ふいをうたれて、びっくりして言いました。
「だって君のこのセーター、お初だろう。」と、明ちゃんは、口をもぐもぐさせながら言います。
「ちがわい、もう去年買ったんじゃないか。」
明ちゃんは、弘の様子に気をくじかれたように、ちょっとばつの悪そうな顔をしていましたが、はじめて弘がおべんとう箱を開けないでいるのに気がついて、
「君、なぜ食わないの。あ、はしをわすれてきたの？」と聞きました。
「うん。」と弘は顔をしかめて言いました。
「なら、先生に言えよ。」
「ううん、いいんだよ。」
「だっておなかがすくだろう。じゃあ宝来屋（ほうらいや）でパンを買ったら？」
「ううん、食べたくないよ。ぼく、家へ帰ったら、うんとおこってやるんだ。」

弘はこう言って、おべんとう箱をカバンに入れて、一人だけ外へ出ました。

外はいつの間にか日がかげって、雨にでもなりそうな空もように変わっていました。寒さが、ぞくぞくとはだにしみます。目の前を、小さな紙くずが風のふくたびに、あっちこっちへころころころがりまわりました。

三

その日、弘（ひろし）はそうじ当番でした。弘は当番長なので、そうじがすむと、先生のつくえの上で当番日誌（にっし）を書き始めました。みんなは向こうのすみへよって、グウ、チョキ、パアをしながらキャッキャッさわいでいました。そのうちに、だれかが、

「あ、雪だ。」と大声でどなりました。

「えっ？」と弘は顔を上げてまどの外を見ました。低くたれ下がった、なまり色の空から、灰（はい）のような雪がちらちらふり出しています。みんなはまどのところへ行って、がやがやさわぎ出しました。

「君、かさ持ってきた？」
「ううん。」
「正ちゃんは？」
「持ってくるもんか。」
「かさなんかいらないよ。雨ならこまるけど、雪ならね。」
「うれしいな。明日までにうんとつもるといいな。」
「ね、そしたら、みんなで雪なげをしようよね。」
「うん、やろうやろう。」
弘が当番日誌を先生に見せにいって帰ってきますと、みんなは、ろうかに出て待っていました。弘は急いでオーバーを着て、みんなの後ろから外へ出ました。みんなは、寒そうにオーバーのえりを立てて、がやがやしゃべりながら門を出ました。弘は、みんなとならんで歩きながら、

「家へ帰ったらはしのことをうんとおこってやるぞ。なんて、そそっかしやのお母さんだろう。」と思い続けました。

「弘ちゃん、弘ちゃんてば。」

だれかに、いきなり肩をたたかれて、弘ははっと、自分にかえりました。

「どうしたんだい弘ちゃん。あした雪だるまを作ろうねって言ってるのにさ。」

「え、雪だるま？」と弘はあわてて聞きかえしました。

「うん、つくろうよ。また去年みたいに岡田（おかだ）先生の似顔（にがお）につくろうよ。」

「はっは。おかしかったね、あのときは。」

「鼻の下へ小さなひげをつけて、すみで目がねをかいたら、そっくりになったっけね。」

みんなは、白く息をはいて、きゃっきゃっと笑いました。

四

弘が改札口を出ると、雪はもうもうとふりしきって、三間先は見えないくらいでした。お母さんがかさを持ってむかえに来ているだろうと思って見まわしましたが、いませんでした。

弘は、ふぶきの中へ飛びこんで、夢中でかけ出しました。駅の前のあらもの屋の前へ来たときだれか女の人が、

「弘ちゃん弘ちゃん。」とよんだようでしたが、弘はかまわずにどんどんかけぬけました。

家へ入ると、戸の開いた音にお母さんが出てきました。

「お帰り。あら、やっぱり気がつかなかったと見えるわね。」とお母さんは、へんなことを言いながら、オーバーをぬがせて雪をはらいました。

間…一間は約一・八三メートル

「お母さんたら、今日おべんとうにはしをわすれてさ。だめじゃないか。」
弘は上がるなり、ぷりぷりおこりつけました。
「あら、そうだった。わるかったわね。」
「おなかがぺこぺこじゃないか。」
「おや、それで食べなかったの？」
「あたりまえだい。」
「ごめんなさいね。」
「ううん。それにさ、むかえにも来てくれないんだもの、こんなに雪がふるのに。」
「弘、母さんは行ったんですよ。」
「ちぇっ、うそだい。」
「うそじゃありません。三時ごろ、かさを持って駅へ行ったのよ。でも、あちらへ行ってから、今日はお当番の日だったことを思い出したの。よほど待っていようと思ったん

だけど寒けがして、頭がずきずきいたくなってきたので、けいじ板に、
――弘ちゃん、かさは前のあらもの屋さんにありますと書いて、あすこへかさをあずけて、これこれなんですけれど、きっと見落とすだろうと思いますから、前を通りましたら、よびとめてやって下さいって、おかみさんと、ねえやさんとに、よくたのんできたのですよ。」
お母さんは、なみだ声になってきました。
「だのに、お前はお母さんばかり悪ものにするのね。それに、おはしがなかったら、小使(こづか)いさんに言って、わりばしでももらえばいいじゃありませんか。お前は、お父さんがなくなってから、とても、いけない子になったわよ。ひとりっ子だと思って言うなりにさせておけば、いい気になって、何かというとお母さんにたてをつくのね。もういいからお部屋へいらっしゃい。」
お母さんは、ゆび先でなみだをふきました。弘は少し、ばつがわるくなって、そのま

ま自分の部屋へ入りました。つくえの上に、くりまんじゅうが二つのせてありました。弘はしょうじを開けて外を見ました。雪が、もうもうとうずまいて、ふりしきっています。

「明日は、つもるな。」と思って見ていますとお母さんが部屋の外から、

「弘ちゃん、おなかがすいてるなら、なべやきうどんでもとってあげようか。それとも、もうじきばんご飯だけど、待てる？」と、さっきとはちがって、やさしく言いました。

そう言われると、弘は、わけもなくなみだがにじみ出てきました。

「え、どっちにするの、弘？」と、お母さんはしょうじを開けて、のぞきこみました。

「あら、寒いのに何をしてるの。雪がふきこむじゃないの。」

お母さんは、入ってきてしょうじを閉めました。

「え、なべやきうどん食べる？」

「ん。」

「食べるのね。」
「うんったら。」
「じゃあ、横町のおそば屋さんへ行って、一つたのんでいらっしゃい。ついでに、あらもの屋さんへよって、かさをもらってくるといいわ。ほんとに、あんなによくたのんどいたのに、いやねえ。」
弘は、こうなると、何もかも自分が悪かったような気がしてきました。弘は、お母さんになみだを見せまいとして、顔をそむけるようにして部屋を出ました。